

日本文学の魅力に迫る

～日本三大随筆を読む 「方丈記・徒然草」編～ 徒然草 3

講 師：現代歌人集会 理事長 林 和清先生

日 時：10月27日（月） 10：00～11：50



■第31段

雪のおもしろく降った朝、ある人のところへ用があつて手紙をやるに、雪のことは一言も触れなかったところがこの雪を何と見るかと一筆申されぬほどのひねくれた野暮な人のいうことなんか聞いてあげられましようか、どこからも情けないお心ですねとあつたのは、興があつた。

■第35段

字のへたな人が、平気で手紙を書き散らすのは好い。見苦しいからと代筆をさせているのはいやみなものである。

■第38段

名聞利益のために心を支配されて、落ち着いたときもなく一生を苦しみ通すのはばかげたことである。財産が多くなると一身の護りのためには不十分なものである。

金は山に捨て、玉は淵へ投げるがいい。個人が言うように利益に迷うのは最も愚かな人である。

位が高く身分が尊いからといって必ずしもすぐれた人とは言えまい。一途に高位高官を希望するものも利欲に惑うに続いて第二の馬鹿である。

知恵と精神においてこそ世に勝れた名誉をも残したいものであるが、熟考してみると名誉を愛するというのはつまりは人の評判を喜ぶわけである。死後の名が伝わったとて一向に無益ではないか。これを願うのは第三の愚かである。



■午後の活動：班活動

1班・2班・4班・5班：川端康成記念館でノーベル日本文学賞に触れ親しみました。

3班：懇親食事会后、史跡今城塚古墳を訪ね時代を超え今日に現れた古代を体感しました。



川端康成文学館



書斎



さぬきうどん旬彩



埴輪群